Quaint Quest

文芸開花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｑｕａｉｎｔ　Ｑｕｅｓｔ

【Ｎコード】
Ｎ６４７７Ｙ

【作者名】
文芸開花

【あらすじ】
父親を殺され人間の姿になった竜・ジルニトラ＝ズメイと、迫害され村を追われたエルフの少女（？）リース。二人の出会いは、ときに残酷で、しかし温かい旅の始まりだった――。

プロローグ（前書き）

こんにちは、文芸開花です。
副部長の燐音がお送りいたします☆

この小説『Ｑｕｅｉｎｔ　Ｑｕｅｓｔ』は、文芸部の約半数の部員によって書かれたリレー小説です。
文章など拙い所も多々ありますが、どうぞよろしくお願いします！

それでは本文どうぞ！

プロローグ

４４０年　帝国

「――――！！」

僕の悲鳴は恐怖で声にならず喉で消える。なんせお父さんを殺したやつの一人が近づいてきたんだから。見た目は可愛らしい少女で、金髪を二つのおさげにしている。顔だってどこか気弱そうな感じが拭えない、そんな感じだ。

でも、信用できる訳が無いじゃないか。どんなに可愛くたって僕にとっては敵でしかないんだから。それなのに、彼女は僕を見つけると優しく頭を撫でてくれた。たまにお父さんも僕を撫でてくれたけど、その手は硬いウロコに覆われていてガサガサしていた。たまに突起が頭の柔らかいところに当たって痛かったっけ。一方彼女の手は暖かくてとても柔らかくて、少し泣きたくなってしまった。

お父さんはよく敵の前で弱みを見せるなって言っていた。小さくてもそれくらいできるだろうって。その言葉がなければ危うく泣いていたよ。

「もう大丈夫だよ。私たちが助け出してあげるからね」

彼女はそう言って僕の背にあわせてかがむ。顔が一気に近づいてきて、そこには微笑みが浮かんでいた。穏やかな優しい笑みが。それがさらに僕に安心を与え、涙腺を緩める。

と、そのときふと違和感に突き当たる。どうして、竜の子供の僕にこんな優しくしてくれるんだろう？　彼らはお父さんを殺しに来たんでしょ？

「安心したのかな？　竜って怖いもんね。こんなところに捕まえられて怖かったよね……」

そっか、彼女には僕は普通の人にしか見えないんだ。お父さんが最後に魔法をかけてくれたから。彼女にとって僕は捕まえられた少年にしか見えないんだよね。

「竜、怖くないもん」

「そっか、怖くないのか」

人を食べたりするってみんな勝手に思ってるけど、そんなことは無い。僕たちは野に生きるものしか食べない。人間なんて本当は全く美味しくないんだ。彼女はそこのところ分かってるのか分かってないのかはよく分からないけど、それでも「うん」って言ってもらえるだけで嬉しくなる。

「レシィ、こいつをどうするんだ？　俺らには余計なことをする暇なんて無い」

「そんな……だって、救出するのは人として当然ですよね？」

彼女――レシィさんはお父さんを殺した張本人にどこか震えた声できく。

「当然？　だから何だ。こいつを救った所で何のメリットがある？

それにお前は俺に指図出来る程に偉いか？」

そいつの顔は暗闇のなかで影になって全く見えない。それでも僕には分かった。こいつは竜を倒したときみたいに気持ち悪く笑ってるんだって。大好きなんだ。こういう風に誰かをいじって困らせるのが。

「すみません……。でも」

「でもも無いわね。だいたいあなたはルインのために付いてきてるんでしょ？　それに今までのことで分かっているわよね？　こんな職業の人間なんて、世界で一番愚かってこと。何も出来なくて、戦うことでさえも一流じゃない奴、つまり下らない奴が落ちる道だって。彼もそうなのよ。諦めなさい」

「おまっ……」

「あら、事実でしょう？」

もう一つの綺麗な女性の声は面白がるように、言う。そして、私はそれを知っていて貴方を愛してるのよねぇと、付け加えた。ルインの声がしばらく消える。彼の息遣いさえも速くなって行くような感じがした。

「ていうことで、諦めな」

「……はい」

レシィさんは蚊の鳴くような声で呟いた。口だけでごめんねと動

かすのが暗闇だというのによく見えた。

――行っちゃった。みんな行っちゃった。僕から全てを奪うだけ奪って行っちゃった。僕を一人残して行っちゃった。ひどい、ひどい、ひどい、ひどい、ひどい、ひどい。僕はなんにも悪くないのに？　どうして、ねぇ？　ねぇ！！

プロローグ（後書き）

今回はプロローグということで少し短めです。

原稿自体は出来ているので、あとは燐音がちょこちょこ手直しして上げていく予定です。

そのため燐音の暇人度、気分により更新速度が変わるかもしれませんが見捨てないでやっ……ていただけると喜びます↑

感想は厳しいものも優しいものも常時受付中です！

いただけると部員一同跳ね回って喜びます↑

そして余談ですが、燐音はこのサイトで「凜月波音」という名前でポケモン不思議のダンジョンの二次創作を書いております。

更新は遅めですが、興味と暇がある方は是非足を運んでやってくだS（（宣伝自重

それでは。

第1話　小さな村と小さな竜（前書き）

今回からいよいよ主人公たちが登場します！

それでは本文どうぞっ。

第1話　小さな村と小さな竜

４４７年　帝国　雪霧洞

「リュート弾きのリースです。一晩泊めて下さいませんか？」

村人たちは何やら話し合っている。そりゃあ今までにも何回か泊まるのを断られたことはあるけど、今日は一日中歩いてとても疲れている。だから負けるもんかと胸を張る。意地でも泊まり込んでやるわ。

どうやら話がまとまったようだ。村人たちは一斉にあたしの方を向いて……襲いかかってきた。

うぅ、身体が痛い……全く何よ！　あたしは泊めてくれとは言ったけど殴り倒して紐で縛れとは言わなかったわよ。しかも、ここどこ？　真っ暗ね…どうやら洞窟の中みたいだけど。

体をよじると紐は簡単に解けた。手探りであたりを見てみるとリュートと革袋もあった。まるで逃げろと言っているみたい。取りあえず革袋から火打石と携帯松明を出して火をつける。ボッと火の粉が散って周りが明るくなった。思った通り洞窟のようね……これで身体は自由になったけど、どっちが出口か分からないわ。

途方に暮れていると、リュートの柄に羊皮紙が結び付けられている。他にすることも無いので読んでみた。

「このたびはとつぜんなぐったり、そのうえこのようなことになってしまってまことにもうしわけありません。おわびといってはなんですが、かえってきたあかつきにはせいだいなうたげをひらきたいとおもっております。しょうさいがきになりますでしょうが、どうかおきになさらずにりゅうをたおし、そのうろこをもちかえってください。」

何よ！　この無礼千万の文章は！　いや、怒っても仕方ないか。とにかく竜を倒すのね！　そんなこと勇者に頼みなさいと言いたいところだけど、ここは魅惑のリュート弾きリース様が魔法の音色で何とかしてみせるわ！　その後村人にどんな仕返しをしようかしら……。

「あの……」

そうよ！　あたしはいままで1年間も諸国をめぐって生きてきたのよ！　こんなところで負けてたまるもんですか！！　っていま、誰か話しかけてこなかった？

「えるふのおねーさん？」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！　竜が出たわ！！」

「えっ…」

いや、あたしとしたことが、落ち着かないと、そうよ、リュートを弾くのよ、私はリュート弾きのリースなんだから！

咄嗟に弾いたのは「月の子守唄」。鎮静効果のあるオリジナルの

曲だ。ふぁあ……いけない、あたしが寝たら意味が無いわ。その時、また声が聞こえた。

「僕が竜だって分かるの？」

おそるおそる振り向くと、ぽかんとした顔の少年がこっちを見ている。

「「……」」

「えーと……何か用かな？」

気まずい沈黙から逃れるため、満面の笑みで話しかける。何てことなの、あたしったら見もせずに声がしたのを竜だと決めつけるなんてどうかしてるわ。

「うん、食べ物持ってない？」

幸い革袋の中にパンが少しあったので、少年に分けてやった。あたしがパンを千切って差し出し

「ふぁひふぁふぉー、ふぇふふふぉおふぇーふぁん」

「……」

……この少年いつから物食べてないんだろ……

少年の食欲に呆れつつ、あたしもパンを食べる。

「……という訳で、とにかく竜のウロコを持ち帰って歓迎されなきゃいけない訳よ」

「えー……」

どうやら少年は気が進まないらしい。

「なんで？」

「だってぇ……竜を倒すなんて……」

「怖がってる場合じゃなぁぁぁぁぁい！！」

「……うわああ……えるふのおねーさん、声おっきーね……っていうか、えるふのおねーさん、どうみても弱そうだけど……だいじょーぶなの？」

どうやらこの少年の中ではあたしは「えるふのおねーさん」らしい。……って！

「大丈夫よ！　あたしの魔法の音色を舐めるなぁ！」

全く無礼千万な奴ばっかりで……仕方無いわね、とは口に出さず、黙ってリュートを弾こうとすると、

「耳がぐわんぐわんしてるよ……あっ、ちょっと待ってえるふのおねーさん、それ……さっきの？」

「さっき……ああ、『月の子守唄』のこと？」

「子守唄……？　っていうか、」

「何よ」

「へたっぴ」

ぽかぽかぽかすかどっこーんばきっがこん

「うぅー。えるふのおねーさんひどーい」

「それとあたしはえるふのおねーさんじゃない。魅惑のリュート弾きのリースなんだから。リース様とお呼び」

「へたっぴリュート弾きなの？」

「……その腹踏ん付けられたいの？」

「みきゃー」

変な悲鳴を上げて少年は転がっていく。あんなにぼっこぼこにしたのに、回復速くない？

そして顔を上げ、懲りずに言った。

「うん、多分無理だよね、ハイ。という訳で偽装しよう」

という訳で海岸にいる。

「魚のウロコとかでいーんじゃない？　だいじょーぶだよ、だって竜のウロコなんて見たことある人いるの？」

「まーね……。適当に色つければ、なんとかなるわよね、多分」

「という訳で魚。リースさん、魚獲ってきて」

「ちょっ……獲れる訳無いでしょ！？　あんたが獲って来なさいよ！」

「え？　だってリースさんはリュート弾きだからリュートで魚おびき寄せんの簡単でしょー？　だったらやってよぉ、誰かが言ってたよ、“楽器の音色で魚をおびき寄せることも出来る”って」

「なっ……」

「リースさぁん」

そんなレベルの高い技……知らない。でもここでリュートを弾かなければ……

「ふう……分かったわよ。やりぁいいんでしょやりゃあ！！」

半ば自棄になってリュートを弾く。曲は……ええいもう何でもいいや。

これは確か……つい最近作った曲だったっけ。名前もまだつけていない。

海岸にリュートの音色が響き渡る。

……。

「リースさあん、魚来ないよ？」

……。

「リースさあああん」

……。

「り・い・す・さ・あ・あ・あ・あ・ん」

「魚なんて寄って来る訳ねぇだろーがンな上級の奴使えっとでも思ってんのか！！」

「うひゃーリースさんがキレたー」

は、はっ。つ、つい本音が…あたしとしたことが。仕方なく正直に白状する。必殺！　“開き直り”！

「ハイ！　魚なんて寄って来ませんでした！　だってそんなん使える訳ないじゃない！」

「初めから言ってよぉ……全く」

そう言って、奴は耳から何かオレンジ色の物体を取り出した。あれは…耳栓？

「……また殴られたいの？」

「うわああ、リースさんがあああ」

あたしは早くも沈もうとしている夕陽を絶望的な気分で眺めつつ、都合良く釣竿とか落ちてないかなと至極どうでもいい思考を巡らせていた。

第2話　竜の鱗……？

――翌朝。あたしと少年は海岸をはなれ、人々のいる街へ向かっていた。

結論から言おう。

あたし達は見事魚を捕まえた。それも結構大きくて、ウロコを見てみると、これが竜のウロコです、と言えば信じてもらえそうなくらい立派だった。

しかし……

いや、捕まえたは捕まえたよ？

いやいやしかし……その過程が……お、大人気無さすぎたというか……。

はっっ！！　つ、つい本音が……あたしとしたことが。仕方なく正直に白状しよう。

必殺！　“開き直り”！

昨日、あたし達は夕陽を眺めた姿勢のまま、微動だにせず、ただ座っていた。

――ただのバカだった。

「……ねぇリースさん……」

さすがに何時間も無言不動でいることに疲れたのだろう、少年は口を開いた。

「何よ……」

「そういえばさ、僕ネット……つまり網？持ってるんだよね」

「……」

無言のまますくっと立ち上がるあたし、右手には固く握りしめたリュート。

どがっばきっどっごーんぴゅっごーーん

「ふみゃー。痛いよー。僕こんなに殴られたの初めて……」

「何でいままで言わなかったんだよこのクソガキが！！」

それにしても本当にこの少年タフよね。こんなに殴ってたら結構な傷負ってるはずなのに……もしかして、見えないところでダメージが蓄積してるのかな？　だったら、殴るの止めないとやばいかな？　死んじゃうかな？

「え……。だって気付かなかっ」

どかっどごっひゅっどがっぴゅーんきらーん☆

はぁ、はぁっ。き、気付かなかっただと？　どんだけヘタレなんだよあのガキ。そして前言撤回、あの少年なら殺してもいい気がしてきたわ。

…っていうか、あのガ……少年がいないような。そういえばさっききらーんって音が聞こえたような。

と、その時。

「りぃぃいすさああ――――ん！！」

「ぎゃあああああ！！」

何と空から少年が。

どがっ。

直前で避けたあたしの真横で少年はあえなく地面に激突。

「いったぁぁ…。僕リースさんのせいで火星見てきちゃったよ全く」

「いったぁで済むの！？　しかも火星って何よ！？　何でそんな所まで行くの！？」

「うーんなんかリースさんと同じ顔の人がいっぱいいたぁ」

「ぐぇっ！　キモッ！！」

「まぁ、それはどうでもいいんだよ。それより、はい、網」

どうでもいいんだ。というか大気圏突破してまた戻ってくるなんて。基本、不死身ってことね。

「あ、そうよ。忘れてた。っていうか何であんた網持ってんの？」

「ハンモック用」

「……」

聞いた？　パンも持ってないくせにハンモックは持っているんだって。

おかしいね？

でもここはあえて突っ込まず、

「……まぁ、とりあえず貸して？」

「はい、どーぞ」

左手でハンモック用網を受け取り、リュートはとりあえず横へ。

両手でしっかり持って、深呼吸して……はい。

「どりゃぁぁぁぁぁ！！」

ぴゅ――――ん、ざぱっ

でぃっぷ　ざ　ねっと　いん　おーしゃん

続きまして――――！！

「どぉらぁぁぁぁあ！！！」

「リースさん、それは魅惑のリュート弾きと自称してる人が叫んでいい台詞じゃないと思うなぁ……」

少年が何か言ってるけど聞こえない聞こえなぁい。

ぴゅーん、どん、ぴちぴちぴち。

ふっ……あたしにかかればこんなもんよ。あたしってば天才……？

あっというまにおさかなさんがいっぱーい。

うん。これなら食料にもなるし、いいわね。

あー、いい仕事したわぁ……。まるで不審者を見るような目であたしを見ている少年の横であたしはひたすら満足気な笑みを浮かべていた。

ただいま魚のウロコを選別中です。

「さーて、どの魚のウロコがいいかなぁ…って何だこの魚は！　尾ビレバタバタさせんな！」

「お魚さんに言っても無」

「お黙り」

「……。あ、この魚でいいじゃん！　ウロコも大きいし」

「よし、剥ぎ取るか」

％∴◇※@＆（剥ぎ取り音は割愛）

――数分後

「なかなかいいウロコね」

「おっきーい！！」

普通の魚の１０倍以上はありそうな大きなウロコを見つけた。

「あ！　他の魚は食べちゃおうか？」

「食べるぅ！」

焼くなり煮るなりして『魚のフルコース　貧乏風』が完成。

「いっただーきまーす！」

……何なのこの不味さは。確かに料理はサラダしかできない。だけどこれは食べ物の域を超えた……

「りぃ…す…さん…」

「きゃあぁぁぁぁぁ！！」

何か死にかけてるよ！！　あたし人を殺すのは好きではないのよ！！　しかも料理で！

「生きるのよ！！」

「……うぅ……ところでリースさん……ウロコは誰に渡すの？」

「えっと、村長かしら。ウロコを持って帰れば盛大な宴を開いてくれるのよね……むふふ」

「顔にやけてるよ？」

「きっと酒も大量よ…いひひ」

「ちょっとリースさん……」

村に着いたはいいけれど、村人と顔合わせるのは気まずい。

「村人に見つからないように村長の家に乗り込むのよ！」

「らじゃー！」

という訳で匍匐前進で村の裏道をせっせと進行中です。

と、その時突然何かにぶつかった。

「いった！！　何？！」

「うわっ、リースさん急に止まらないでよぉ…」

本当に何なのかしら！！　あたしにぶつかるなんて１０００００年早いわ！！！

「ご……ごめんなさい」

んっ？　子供？　しかも女の子？

「あ、いいのよ？　謝ってくれれば」

「本当にごめんなさい、あれ？　……あの、前に会ったことありませんか？」

うっ！　ここでバレるわけにはいかないわ。あたしの計画が潰れるなんて、あってはならないことよ！！

「気のせいじゃない？　ねぇ？」

「……」

いつもテンションの高い悪ガキが黙っているなんておかしいわ……

何かあったのかし

「かわいい！！　名前教えて！！　友達になろぉ？」

え〝ー……。そういうことか。色気づきやがって！

「う、うん。アーシェっていいます」

君もそういう反応なのね！！？　あたしなんか友達ほとんどいないのに……

友達ってそんなに簡単に作れるの？　ねぇ、教えなさいよ！　ねぇ！！

ってこんなこと考えてる場合じゃないわ。

「ところで、村長さんの家まで人目につかないように行く方法ある？」

「私の家の地下から村長さんの家の隣の庭に行けるので使ってください」

「さっそく行くわよ！」

「らじゃー！！」

第2話　竜の鱗……？（後書き）

うぅむ……待て、燐音。まだ切るところがあったはずだ。
もうちょっと適切な箇所が……

という訳でちょっと半端な所で切れていますすみません。

第3話　世界の端のとある村で（前書き）

今回の本文で歌の歌詞が記載されていますがこれは作者が創作したものであり、既存曲に酷似しているもの若しくは同一のものがあったとしても、それは作者がその歌を知らなかったためであり、作者に既存曲の無断転載を行う意図は無いことをここに明記します。

……と、長ったらしく書いてみましたが被ることは無い気がします。でも世界は広いですからね。一応。

それでは本文どうぞ！

第3話　世界の端のとある村で

今だったら、この時のあたしは、世界最強の馬鹿丸出しだったなと思うけど、でも、でもでも！　酒の誘惑に勝てる人間なんかじゃないのは分かるでしょ！？

……ま、要するにただの馬鹿なんだね、あたしは。とりあえず、地下道を急いで進む。

「ほら、さっさと行くわよ！」

「らじゃー！　……！？」

……え？　今、後ろで何かあった様な……おかしいな？　リュートはきちんと持っている。あれ、何か聞こえるな。壁の向こうからだ。

「……少年……入れた……こさえ……盛大な宴が……」

嫌ぁぁぁぁぁぁぁァァァァァァ！　そうだ、あの少年がいない！

思わず壁から飛び跳ねて離れた。するといきなり壁が倒れてきた。間一髪のところで避ける。暗くて周りがよく見えなかった。石そっくりのダミーだったらしいわね。ま、それだけで済んでよかったけど。

やっぱり目の前に隠れた道が見えて、進まない人はいないよねー。じゃ、れっつごー。

……。

ゆっくりと、音を立てないようにドアを開けた。すぐに赤いカーテンの影に隠れる。

「……え？」

少年は確かにそこにいた。不自然な所はなかった。黄緑色の光る液体の入った鍋の中で呻いてること以外は。あ、充分不自然ね。

「ダメ……渡しちゃ……リース……」

「まだ何か言ってんのか、今度のは！」

黒い衣服を着た男が言った。どうやらまだあたしに気付いていないらしい。

「アーシェはどこだ！？　早く呼んでこい！」

しばらくして、アーシェが姿を現した。少年が叫び声を上げる。ボクト……トモダ……とか呟いているように見えた。

「そろそろだ。アーシェ、さっき見た女はどこへ行った！？　もう奥の間からここへ連行されてもいい頃だよな！？」

アーシェは頭が上げた。あれ？　道教えてくれたあの時とどこか何かが違うような気がするんだけど……ていうか、今にも見つかりそ……うっ！？

あたしは思わずカーテンを握る手に力を込めた。

黒服の男は言う。

「宴（フィースト）……宴（フィースト）の実行だけは阻止せねば……」

フィースト？　何を言っているのだこの男は。

「アーシェ」

黒服の男がそう呼んだ途端、あたしはさっきの疑いを確証へと変えた。

アーシェの目が……紅い……！

純粋そうなその少女の瞳はみるみるうちに紅へと染まっていく。

鈍い銀色に輝く粉状のものが鍋へと投げ込まれる。

「……少年に、神の祝福を、そして……」

少女が静かに唱える。

「……神の裁きを」

鍋の中の液体は紫色に光り、少年の悲鳴が聞こえた。

「――――やめろっ！！」

同時にあたしは飛び出し、鍋を思いっきり蹴り倒した。

鍋から液体と少年が転がり出てくる。

「大丈夫！？　怪我は！？」

「……大丈夫……もう少しで死ぬところだったよ……ありがとう……」

あたしは少年を自分の元に引き寄せた。

幸いな事に命に別状は無いようだ。

「……っ、誰っ！？」

アーシェが上げた声に反応した黒服の男がこちらに向き直って言う。

「……おいアーシェ……こいつ、リースじゃねぇか？」

「……え？」

しまった。少年の無事に安心したのも束の間、あっさりと正体がばれたようだ。

「ははあ……？　ご本人様の登場かい？」

「……へえ、こいつが噂のリース。私の儀式を邪魔したのもこのリースってわけね？」

二人はじりじりとあたし達のもとに近寄ってきた。

まずい。

でも、この距離では……

とっさにあたしは傍にあったリュートを掴む。

「……クク。あんたたちが宴（フィースト）なんかを実行しようとするのが悪いのよ。こんなに鱗の見が早かったのには驚いたけど……もうこれでおしまいね」

さっき盗み聞いた言葉を適当に組み合わせて口走る。口先こそ余裕ぶっているが、本当は恐怖で心臓が口から飛び出しそうだ。あたしは震える手でリュートを弾き鳴らす。

とっさに弾いたのは、「王国の物語」――あたしの故郷の村で語り継がれている歌で、あたしが最初に弾けるようになった簡単な曲だ。何故これがいきなり頭に浮かんだのか分からない。一番慣れた曲だったからだろうか。

「な……っ！？　なんでこの曲を……」

「よせっ、やめろ……！」

男たちはなぜか耳を塞いで苦しみ出した。あたしの手は止まらずに身体に染み込んだ歌を奏で続ける。

どうやらこの二人がリーダー的立場にいたらしく、周りの人たちはどうすることも出来ずに戸惑っているようだった。

やがて二人は耳を塞いだまま、床にうずくまってしまう。

「はあ、はあ……」

「た……倒したの……？」

「そのよう、ね……とにかく、ここから早く逃げましょ」

あたし達は訳も分からないまま建物の外に出て、そのままそこから逃げるように離れた。

「……そういえばさ、あの曲どこで覚えたの？」

もう日はほとんど沈み、あたし達は今日泊まれそうな所を探していた。

「んー、故郷の村で教わっただけとしか言いようが無いわね」

「じゃあ何であいつらは倒れたの？」

「さあ……それはあたしにも分からないな……特別な歌って訳でも無いし……。あ、そうそう、確かあの歌には歌詞もあってね、何だっけ……」

あたしは子供の頃覚えた歌詞を頭の中で紡ぎ出す。

昔々あるところ
とあるひとりの旅人が

世界の端のある村に
竜を捧げに行きました

そうそう、こんな感じだった。

確か、続きは……

そこでその旅人は
村の大きな建物で
美しい少女に会いました
その少女は鍋を焚き
歓迎の言葉をかけました

まさか。あたしははっとした。
ゆっくり、ゆっくり、続きを思い出す。

少女は薄く笑いながら
紅い瞳を向けました
襲われてしまった旅人に
この歌を捧げます
この歌を捧げます

……まさか。

息が、止まるような思いだった。

第４話　ある少女の憂鬱（前書き）

サブタイが全然思いつかない……
ええ、とてもとても微妙な箇所だからです。
相変わらず燐音は切るのが下手なので←

では本文どうぞ！

第４話　ある少女の憂鬱

「リースさん、起きてよぅ」

少年の声で目が覚めると、そこは小さな石造りの小屋の中だった。

窓から差し込む光は明るく、もう昼過ぎのようだ。

「えっと……何でここにいるんだっけ？」

「……」

「おーい、聞いてる？」

「あっごめん。えーと……何でって、リースさんが森の中に入ってってこの家を見つけたんでしょ？　無理矢理錠を破壊して」

少年の指の先には無惨にも破壊された木製の南京錠の残骸が転がっている。

あ、そういえばそんな事をした気もするな…。でもいいじゃん別に！　こんな蜘蛛の巣と埃だらけの家なんて誰も住んでないわよ！

と言ってやろうとしたが、どことなく少年の様子がおかしい、昨日のように失礼な発言もしてこないし、どことなく心ここにあらずと言った感じだ。まぁ昨日殺されかけたのだから無理もないか。

「そういえばさ」

「何？」

一瞬少年の体がピクリと恐れるように動いたのはあたしの気のせいだろう。

「君の名前って何？」

「ジルニトラ＝ズメイ」

「なんか聞き慣れない上にこのリース様より長い名前なんて生意気ね」

「本当はもっと長いよ、聞く？」

「…いや、結構よ」

でもあたしズメイってどっかで聞いたことのあるような……頭の中をひっかきまわしてみるが、昨日から何も食べていないせいで、駄目だ、食べ物しか頭に浮かんでこない…。

「あのさぁ、私の革袋どこに……」

言いかけて気付く。ジルニトラ……この際長いからジルでいいだろう。ジルはいつの間にか傍で寝息を立てていた。これだから子供は…と言いかけたが、さっきまで寝ていた自分が人のことを言えない。と、ふとその横になにか置いてあるのが目に入った。

「……新聞？」

どうやらだいぶ前の新聞の切り抜きみたいだ、ところどころ彼の

右手で隠れて見えないが、大きな見出しが目に入った。

〈勇者――東ノ竜――ヲ倒ス〉

４４０年　帝国　帝都

「さすが勇者様、この度は本当にありがとうございました」

私たちが屋敷に帰ってくると老婆と少女による早速出迎えがあった。それももういつものことになっていて大分慣れたけれど、最初は戸惑ってばかりだったわ……。今でも結構内心では戸惑っているけれど。

ただ、彼の迷惑にだけはなりたくないから。

「当たり前だ」

「感謝はお金でよろしくねー」

その当の彼は素っ気なく答える。そして、彼の腕に自分の腕を絡ませている彼女もちゃっかり付け加えた。その様子に溜息を漏らす青年が一人。

これが今のパーティー。昔からたまに増えたりしたけど基本的にはこのメンバーだった。

「ゆ、勇者様……感謝の宴を開くのですが」

「そうか、だが先に風呂に入りたい。湯は張ってあるか？」

「え、あ、え……」

少女は焦って目を泳がせる。それを見かねて老婆は何かを言おうとしたがその前に彼が口を開いた。

「出来ていないのか。私たちは竜を倒して汚れていると予想はできなかったのか？」

そして、彼は手を上げる。また、なのね。

私はぎゅっと目をつむる。その次の瞬間パシッという音が響く。ちょっとだけ目を開けてみると、老婆の頬が真っ赤になっていた。

「申し訳ございません。どうかお許しを」

老婆はそう言うと少女の背を手でさすりながら地に伏す。少女も慌ててそれに合わせて地に伏した。彼はそれをただじっと見つめている。

これもよくあることだった。

行先で気に入らないことがあるといつもこれだ。私や彼女に振るわれたことは無かったけど、あの青年はよくこの手のひらの餌食となっている。

「ま、許してあげなさいよ。私たちは商売でやってきただけよ。我

が物顔で振舞う資格は無いわ」

「……ヘレンに免じて許してやる。顔を上げろ」

「は、はい」

二人はそれぞれに引きつった声で答え、ゆっくりと伺うように顔を上げる。その顔はいつものように恐れで満ちていた。

勇者様はそれをまたじっと見つめると踵を返して外に向かって歩き出す。彼女、ヘレンはこの老婆に話を聞き始める。青年は部屋まで少女に案内してもらっていた。

――ごめんなさい。弱くてごめんなさい。

私は一人残され突っ立ったまま、そう心の中だけで繰り返した。

久しぶりに戻る自分の部屋は、薄く埃を被っていた。無理もない、一月ばかりも留守にしていたのだから。

ベッドに身体を預けると長旅の疲れがどっと出たのか、すぐに眠たくなってきた。

お姉さまの夢を見た。

夢の中でお姉さまはとても楽しそうだった。誰かと談笑しながらリュートを弾いている。

バーのようだった。ふとしたはずみでお姉さまと話している人の顔が見えた。

「ミカルさん？」

それは『霧の家』のバーテンダーのミカルさんだった。

『霧の家』というのは港町アウシャンにある、小さなバーだ。初めて連れて行ってくれたのはヘレンさんだが、その時に来ていた客と口論したためなのか、二度目からは一人で行っている。客のことをすべて平等に扱う温厚な彼は、私が行くたびに相談に乗ってくれた。思えば彼にずいぶん支えられたこともあったっけ。

その時、先程からカウンターで酒を飲んでいた男が立ち上がった。酒瓶を持ったまま、お姉さまの方に歩み寄ると、言った。

「さっきからうるせぇんだよ！　この下手くそ！」

もっともだと思った。と、同時に危険な気配も感じた。お姉さまの事だからこのままじゃ間違い無く喧嘩になる……！

案の定、お姉さまは演奏をやめようともせずに、顔だけ上げて言った。

「何よ！　あたしの演奏の良さが分からないあなたが悪いのよ！」

「なんだと！　このエルフ野郎！」

指が乱れて不協和音を奏でる。

楽器が落ちる音。

「自分の身分を考えても見ろよ？　エルフの分際で人の街に入り込んで金取って生きてるなんて生意気だ！」

「……っ！」

お姉さまがリュートを拾い上げて今にも殴りかかろうとしたその時、

「そこまでにしなさい」

ミカルさんがお姉さまと男の腕をとりながら言った。

「静かに酒が飲めないなら出ていきなさい」

「んだテメエ？」

突っかかろうとした男の額に向けてミカルさんはコルクを差したままのワインオープナーを向けた。

「出ていきなさい。あなたのような客は迷惑です」

「……こんな店なんかこっちから願い下げだぜ！」

男は大声で捨て台詞を吐いて出て行った。

静寂。

「どうします？　あなたも出ていきますか？」

ミカルさんの言葉に、お姉さまは首を横に振った。

「それなら喧嘩はおやめなさい。さぁ、あの素晴らしい演奏をもう一度聞かせてください」

店内からくすくす笑いが漏れた。半分はお姉さまの演奏が下手なことに対しての、残りはミカルさんの天性の音痴への笑いだった。

お姉さまは申し訳無さそうに俯いたままだ。

「お姉さまっ！」

私の声はお姉さまに届かない。

「お姉さまぁぁぁっ！」

それでも私は叫んでいた。

次の瞬間、私はお姉さまだった。

躊躇（ためら）いつつもリュートを構える。だが手が弦に触れる頃にはその迷いも消えていた。

弾く曲は決まっている。

「旅人戯曲３篇、海」

控えめな長調が主題を奏で始める。

お姉さまなら歌詞を覚えているだろうが、私は忘れた。何しろ１０篇まである長い戯曲だ。確かお姉さまは第７篇、追悼が好きだった。変わったところが好きだなぁって笑われていたっけ。それに比べて私が好きなのは第３篇、海。平凡な自分がつくづく嫌になる。

私は……個性が無い。皆と同じ私なんて必要無い。

沸き上がってくる悔しさを旋律に乗せる。

いつしか曲は短調に変わり、はじめとはうって変わって強いテンポを刻む。悔しさは少しずつ消えて快感に襲われた。

ああ、気持ちいい。やっと、やっとお姉さまになれた…嬉しい…！

曲が終わった。

満場の拍手。

そして目を開けると、そこは自分の部屋だった。

第5話　移動手段（前書き）

現在テスト2週間前です。
なのに燐音はここにいます。
なぜかって？

……そこにＰＣがあるかｒ（（黙

では本文どうぞ！

第5話　移動手段

４４７年　帝国　雪霧洞傍の小屋

あたしは何の気無しにその紙切れを取り上げて読んでみた。特に興味があった訳ではないが、まあ、暇潰しって言うか、そんなところ。新聞の一面らしく、あたしの知らない新聞名が独特のフォントで右上に踊っている。

それには、西国の竜を勇者が倒したという記事が載っていた。ふーんと呟いて、記事を読み進めていく。

そして、あたしは次の瞬間とんでもないものを目にしてしまった。

〈竜の名は、ステイル＝ズメイ〉

一瞬、目を疑った。

そして次に自分の頬を最大出力でつねった。

……痛い痛い痛い。

でも。ズメイって……ポピュラーな名前じゃない。少なくともあたしは見たことも聞いたこともなかった。

……まさか。

〈昔々あるところ　とあるひとりの旅人が　世界の端のある村に竜を捧げに行きました〉

最悪な想像が、確信に変わった瞬間だった。

何故かは分からない。思えばあたしはいつも不運に見舞われていた。

通っていた魔法学校はエルフだからというだけで中退させられ、妹とも引き離された。未だにその妹とは、連絡も取れていない。あの子は今、どこで何をしているのだろう？

リュートの腕だって、ジルにはあんな大口叩いてるけど、はっきり言って上手いとは言えない。寧ろ妹の方が上手いぐらいだ。

そして――今。たまたま拾った少年。ジルが竜だと分かれば、間違いなく追われる身になるだろう。
本当に、不運としか言いようがない。

でも、あたしはこの少年を見捨てる気には、ましてやどこかに差し出す気にはなれなかった。

あんなに無礼千万なことを言われて、しかも出会って間もないのに。

そう、あたしは馬鹿だった。

こんな災難はこの少年を捨てれば簡単に回避出来る。

なのに、あたしは自らその退路を断とうとしている。いや、もう断ってしまったのかもしれない。

お父さん、お母さん、ごめんなさい。あなたたちの娘は、最強の馬鹿野郎です。

でも、これがあたしの意志なんです。もしかしたら捕まって殺されるかもしれないけど、それでもそう決めたんです。

だから。

そうして、ふと思う。

ジルはまだ、規則的な寝息を立てて眠り続けている。今のことに気付いた様子はなさそうだった。

だったら、あたしの胸三寸に収めておこう。知らないふりして、明日からも普通の、ちょっとヘタレな少年として接していく。

私は、件(くだん)の新聞をそっとジルの手の下に戻した。

翌朝。

「リースさん、起きてよぉ」

……ぅ……うるさいなぁ。夢の中でまで騒がないでよ。

「リースさあん、もう朝だよ？　僕より起きるのが遅いなんて、リースさんはお寝坊さ」

「誰がお寝坊さんだとぉぉぉぉぉぉぉ！？」

「ふみゃあ！」

あっ……いけない。ついリュートで殴り飛ばしてしまった。まぁいっか。てかこの子、悲鳴のバリエーションが随分豊かね。

「ふにぃ……痛いよぉ。ぼうりょくはんたーい！」

「それはさておき」

モード切替がとっても速いのがあたしの取り柄。

「なんかこの村は色々と危ないから、とりあえず脱出するわよ。昨日みたいな目には遭いたくないでしょ？」

ジルはぶるんぶるんと音が出そうなぐらい首を横に振りまくった。

はい、ぼっさぼさジル一丁上がり。

「村の人に見つからないように行かなきゃいけないんだよね……。あー怖い怖い」

呟いて、あたしは窓から外を窺う。無計画じゃ村人に見つかってアウト、もたもたしててここにいるのがばれてもアウト。

「どうすっかなー……」

なんか、なんと言いますか、絶望的な予感しかしなかった。

まぁ、この状況を回避できる、ジルを見捨てる以外の方法。

馬鹿なあたし達が思いついたのは一つだけ。

そう、それは……いつかマンガで見たあの伝説の方法。

……ずばり！

「土管の中に入ってこっそり移動しちゃおう作戦！！」

……。

……仕方無いでしょ！？　あたし自分のこと馬鹿だって分かってるし。

このヘタレ少年が良い案を思いつくと思う！？　しかもこの阿呆、

「一度土管の中に入ってみたかったんだよね～」
って言ってんのよ！？
あぁ……やっぱりコイツ置いていこうかな……？
あたしが真剣に悩み始めたその時、
「ねぇリースさん」
声がかかった。もちろんジルから。
「……なあに？　ジルニトラ＝ヘタレ＝ズメイ君？」
「なっ！？　ミドルネームがヘタレに！？　そんなん嫌ぁーーーーー！！」
入っていた土管ごとごろごろと転がるジル。
もう本当……嫌……。
頭を抱えてうずくまるあたし。
なんでこの子が竜なの？　っつか、ヘタレな竜ってあり？　じつは同姓同名なだけじゃないの？　あぁでもズメイなんて姓の同姓同名なんて有り得ないし……。あっでももしかしたら……
たっぷり現実逃避３分間。

さすがに見かねたジル。

「あのぅ……そろそろ出発しよう……？」

間髪いれずすくっと立ち上がるあたし。

「えぇ。行きましょう」

「は、はぇ……？　う、うん……？」

あたしはすたすたと土管に向かい、そのままがこんと中へ。

「あ……あぅ……？　リースしゃぁん？」

ジルはあたしの行動の急変に戸惑ったのか、間抜けな声を出した。

あたしの現実逃避3分間の後に辿り着いた結論。

「竜でも人間でもヘタレでもどうでもよくね？」

そうよ、あたしは馬鹿なのよ。昨晩もそれを実感したけれど、改めて実感。あたしは、あたしに害を及ぼすかもしれないこの少年、だけどあたしを慕ってついてきてくれるこの少年と共に行こうと決めた。これからきっと大冒険が始まるだろう。そんな予感がする。でも、この少年と行こう。今はまだ他人、知り合い程度なのかもしれないけれど、これからそれ以上になろう。並びに友達ってこんなもんから生まれるんじゃない？　違う？

そんな格好良いことを考えながらあたしはがこがこと土管ごと歩み始めた。

音を立てながら移動し始めてあたしはあることに気がついた。

――やる気と成功する確率は比例しない――

もう移動して十分。進んだ距離五十メートル……。遅すぎるでしょ！？

走ったら十秒かかるかかからないかの距離よ？

「リースさん……疲れたぁぁ……」

「同感だわ……」

「あっ！　あれが出口じゃない？　わぁい！」

目線をあげると村の門が見えた。っていっても数百メートルは先だけど…。

コイツ目はいいのね。目は。

「り、リースさん止まってぇぇ！」

「は？　え？」

言われるままに止まるとごっついおばちゃんが目の前から歩いてきた。

推定体重８９ｋｇ。ってこんな非常事態に推定しないでよ、自分。

「あら？　この土管……隣の奥様のものだったような……？」

えぇー！！　やばい、やばいよ！　見つかりませんように……。

ていうか何で隣の奥様が土管なんて持ってるのよ！

「まっ、気のせいね～」

ありがとぉぉ……おばちゃん。九死に一生を得るってこのことかしら。あれ、ちょっと違う？

――３０分後

はい、やっと村を出ました！　疲れたわ……。

「さて…村を出たはいいけれど、どこに行こうかしら……」

「あんまり外、出たことないからよく分かんない……」

そっか……ジルは竜だったんだっけ。ずっと洞穴みたいなところにいたのかしら……。

「んー、とりあえず村と逆方向に行ってみるわよ」

「りょーかい！」

第5話　移動手段（後書き）

なんだかんだ言ってもう半分弱来ています。
でも？も書きます。ええ、誰に何と言われようと書いてやりまｓ（
（強制終了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6477y/

Quaint Quest

2011年11月22日23時55分発行